

＜外国文献解題＞

Dan C. Lortie, Schoolteacher :
A Sociological Study (Chicago:
The Univ. of Chicago Pr., 1975)

東京女子体育大学 西 穰 司

1.

ここ数年、先進諸国の教育動向の影響もあってか、わが国でも教師教育論議が盛んである。公教育制度の成立前後から、「教育は教師次第(As is the teacher, so is the school.)」という合言葉が使われてきたが、この言葉が再び注目され出しているのが、今日教育改革論議の一つの特徴といえよう。すなわち、教師の主体性や力量に焦点化して教育改革の方向を確定し、現実化しようとする意図は、それ相応の意義があると考えられる。

ところで、これまでの教育学の学問的性格がそうであったように、今日の教師教育論議の大半は、確たる裏づけ(実証)を欠いた単なる主張の域を脱するほどの、目を見張るべきものがほとんど見られないというのが、筆者の率直な印象である。

こうした今日の教師教育論議のなかで、ここでとりあげようとする、シカゴ大学教育学部教授ローティ(Lortie, D.C., 1926-)の手になる『学校教師——その社会学的研究』(Schoolteacher: A Sociological Study)は、タイトルにあるごとく社会学的方法によるという一つの立場に立つものではあるが、多くの示唆を我々に与えてくれると思われる。すでに発刊されて5年になるが、わが国では本格的に本書が取り上げられていない事情もあるので、本紙面をかりて、その内容の骨子を紹介するとともに、とくに教育行政・学校経営研究を志す者の立場から、若干の評言を提出したいと考える。

2.

本書は、アメリカの初等・中等教員を対象にした研究なのであるが、その特色の第一は、10年余にわたる経験的事実をきめ細かく掘り下げた社会学的調査を基礎にしている点に見出さる。すなわち、公教育制度の普及とともに、今や学校教育が身近な所与のものとして存在しているために、その間に形成されてきた伝統的な学校観や教師観そのものを真正面から取り上げ、しかもそれらの可否を率直に疑ってみるという作業がなされていない、とローティは指摘する。こうした問題関心を基礎にして、「こうあるべきである」とか、「こうあるのが望ましい」という論議の前に、教職をとりまく現実体に対して、社会学者の立場から鋭い分析のメスを入れようというのである。

というのは、近年学校教育の機能障害が指摘され、この課題解決のためのいろいろな学校改

革のプランが提示されながら、それらが所期の成果が得られないことが多い背景には、学校教育をとりまく現実の全体状況に関する確たる研究が欠如しているという要因が、少なからず影響しているというのである。

こうした研究関心から、彼が採用した具体的な研究方法は、かなりユニークであり苦心のあとうかがわれる。一つは、教師自身に自己の職業生活にまつわる内面世界について、自分の言葉で表現させるといふ、先の開かれた探究法（open-ended-inquiry）——相当時間をかけた、あらかじめ設定された綿密な計画にそった面接調査（対象100人）——を採用し、その調査結果を詳細に分析して、そこから教職の実態についての「斬新な洞察」を得ようとしているのである。さらに、ここで得られた調査結果を吟味・補充するために、別の地域（学区）を対象にした、大規模な質問紙調査（サンプル数約6000）を実施しているのである。

また、以上の調査研究の他に、その限界を補充する意味もあって、先行の歴史的統計や全国調査の結果についても丹念に検討しているのである。

さて、本書の第二の特色として指摘しなければならないのは、アメリカにおける教職の「エートス」（ethos）を解明しようとしている点である。彼の言う「エートス」とは、教職従事者が共有している、他の職業分野の従事者と区別される志向性（orientations）と感情（sentiments）のパターンを言うのである。とくに、この両者の組み合わせられ方（constellation）を、前述の調査を基礎にして多面的に検討し、あわせて他の職業との比較をも織りまぜながら描写しているのである。

この教職の「エートス」の解明は、職業の歴史的形成過程や、新規入職、社会化、職歴（career）、職務からもたらされる報奨といった主として制度的分析による教職の構造的解明と、もう一方では、日常的な職務遂行場面に生起する教職従事者自身の内面的意味づけ（ないし感情的態度）の内実を検討して、この志向性と感情との教職特有の組み合わせられ方として提示しているのである。

「エートス」といえば、M. ヴェーバーが言う、宗教教理や倫理綱領と区別される、人びとを特定様式的生活実践に駆り立てる宗教的起動力の意味で一般には理解できる。もちろん、ここでのローティの言う「エートス」は、ヴェーバーのそれと基本的に通じるところは多分にあるが、彼はきめ細かな現実の経験的事実の分析に力を注いでいるので、ヴェーバー流の社会経済史的分析を中心にした宗教社会学的な意味での「エートス」とは、やや趣を異にしていることは、前提的に承知しておかねばならない。

ともかくも、このローティの本書は、教職の「エートス」の解明というたいへん大それたテーマを設定し、それ相応の研究方法を装備したうえで意欲的に取り組んでおり、かつ一応整序された成果を提出しえているという点で、これまでの大方の教職研究の壁を打ち破るほどの作品であるといっても過言ではないと思われる。

次に、本書の内容を、教職の「エートス」の解明という彼の設定したテーマに添ってその概要をみてみよう。

3.

本書の構成は、以下のようになっている。

第1章 (教職の)歴史的 성격

第2章 新規入職と(伝統保持的性格の)再肯定

第3章 社会化の限界

第4章 職歴と(職務遂行に伴う)報奨

第5章 教育目標観

第6章 (教職)特有の不確実性

第7章 (教師の)感情の論理

第8章 感情と対人好悪感

第9章 (将来の)変容についての考察

資料, 注, 参考文献, 索引

※なお, ()は筆者が挿入

本書の内容は大きく4部に分けられる。まず第1部は第1章の歴史的考察である。ここでは、アメリカの過去3世紀にわたる教職の構造的 성격にみられる伝統保持的側面と変容の側面とのバランス状態について考察している。たしかに、学校のエデュケーションの中味や教育学の理論における変容は認めうるが、教職の構造そのものは相対的に連続してきているとしている。つまり、その構造とは、権威の配分形態、教員の社会的地位、教職の職務内容とその性格、技術革新の程度、教職への入職を促す諸要因等をさすのであるが、それらのいずれにおいても、基本的に抜本的な変容をとげてはこなかったと論じているのである。

とくに、筆者が着目したいのは、19世紀に多級学校が出現したにもかかわらず、教師の職務遂行における相互依存性は、高まるどころか、個々の教師が別々の教室での——いわば閉じられた世界での——就業形態がいつそう強化されてさえきたというのである。この事実を、彼は「細胞型組織」(cellular pattern organization)と呼び、教育課程についての慣習的な考え方や、教職へのコミットメントの性格、教職から他職業への高い転職率とも深く結び合っていると指摘している。

次に、第2部(第2, 3, 4章で構成される)では、教職の社会的性格の継続的安定性を支える主要なプロセスとして、新規入職、社会化、職務遂行に伴う報奨を検討している。ここでは、教職の志望理由が主観的で、冷静で的確な認識を欠いていたり、他職への入職が困難なので第2次的選択の対象としては比較的よい条件を備えている教職が志望されているとか、女性の職業としては家庭での家事役割との両立可能性が高いなどの諸点についてきめ細かに具体的なデータを上げて吟味している。そして、そもそも教職への入職者たちがきわめて多様な、時には相対立するような職務に対する認識や動機をもっているという。しかも、そうした認識を根本的に変えることなく教職生活を続けている傾向が認められると指摘する。

また、社会化については、フォーマルな教育・訓練はほとんど影響力をもっていないのであって、教師たち自身が、養成機関での学習、教育実習、現職教育よりも、むしろ自身のそれ以前の長期にわたる学校時代の「観察という名の実地訓練」(apprenticeship of observation)の影響を強く受けているというのである。そして、彼は、教職は本質的に“自己養成的職業”(self-made)であるとまで言い切るのである。

第3部(第5, 6, 7, 8章から構成される)では、日常的な教師の職務内容に焦点をあて、そこに生じている教師の感情が取り上げられている。すなわち、ここでの主要な論点は、次のようである。大綱的・一般的な教育目的と、日常実践に直結する具体的目標との間に内的一貫性が追求されておらず、教師自身の個人的な主観的解釈が優先されている。また、職務遂行の結果についての評価が、関連する要因が複雑に絡み合い単純化しがたいことも手伝って、きわめてあいまいになってしまい、教師は自己流に一部の生徒の近似的な定量的成果に満足感を覚えている。しかし、教師は、表向きは全ての生徒の望ましい成長・発達を助成するのが自分の使命だと言う、といった自己矛盾的な認識をもっているという。

また、両親や学校管理者に対して、教師は自分たちの職務内容の核となる事項について干渉されることを極度にきらい、しかも自分たちの自己矛盾的な認識を正当化しようとさえするのである。そして、こうした点は、そもそも教職の職務内容自体がすでに、特有の不確実性という不可避的な性質を孕んでいるためであると、分析している。

さらに、第8章において、本書の主題であるアメリカ教師の「エートス」を、次のごとく要約するのである。すなわち、教職が生成・存続してきたプロセスにおいて、教師は保守主義(conservatism)、個人主義(individualism)、当座主義(presentism)——生涯の職業としてではなく、別のより強く志望する職業につくまでの当座の一時的な職業とみる考え方——という3つの志向性を内包する「エートス」を有しているというのである。そして、それらは、教職の日常的な職務遂行の過程で生起する感情と深く結び合っているというのである。もちろん、この両者が単純に結び合っているのではなく、そこには内的な緊張を伴うものではあるとしている。

たとえば、個人主義の殻から脱して、他者(同僚教師たち)と協働し、共通利益の拡大に努めようとして、団体交渉を推し進めようとする意思を、多くの教師はもっている。しかしもう一方で、個々の教師の職務遂行能力を互いに評価(査定)し合ったり、また、職務遂行の質を高める——不確実性を克服する——ための共同研究を積極的に積み上げるといったことには、抵抗感があり、ちゅうちょしてしまうのである。

このように、複雑な性格をもちながらも、先の三つの志向性を有する教職のエートスが、将来変わりうるかどうかについて検討したのが、第4部(第9章)である。ここでは、教職のエートスの変革の可能性が、行動科学的、システムティックな教育研究や教師教育方法の新たな開発を契機にしてある程度存在しうることを認めてはいる。しかし、その変革は決して容易には実現されがたいであろうとも、彼は言うのである。そして、本書の結びとしてローティは、

教職の専門文化の成熟、とくに教職の技術体系（専門的学識）の高度化が、そのとりわけ重要な鍵となることを示唆しているのである。

4.

以上のように概括できる本書の内容は、個別的な事項としては、これまでの先行研究においてすでに明らかにされてきたことも多いだけに、その限りにおいて必ずしも目新しくないので、「斬新な洞察」とは言いがたいかもしれない。しかし、筆者は、本書が従来の教職研究の枠を大きく脱し、教職における「エートス」の解明という主題に挑戦し、きわめて広い視野から、しかも精細な経験的事実の掘り起こしという忍耐強い作業を通して、設定された課題をおおむね達成している点は、率直に高く評価されてよいと考える。アメリカにおいても、このローティの著作が、教職の社会学研究としては、1932年のウォーラー（W.Waller）の『教職の社会学』（Sociology of Teaching）の水準を越えるすぐれたものだとする評価がなされた（R.J.Schaefer）としても、不思議ではないであろう。

しかし、きわめて野心的な研究であるだけに、その詳細については今後検討されるべき課題もなしとしないであろう。素朴な言い方をすれば、なぜ彼がタイトルのせめて副題としてでも、直截に「アメリカ教師のエートス」という表現をしなかったか、という筆者の疑問につながるころではあるのだが。（紙幅の関係もあって、その厳密な検討は別の機会に譲らざるをえないが。）

最後に、とくにわが国の教育行政・学校経営研究を志す者の一人として、ここで筆者は本書に関して、2、3の評言を提示したいと思う。

まず、本書の内容をわが国の問題に引きあてて考えようとするに際して、限定をしておかなければならない。つまり、ローティの研究は、あくまでアメリカの教員を対象としているのであるから、その内容がそっくりそのままわが国の教員にあてはまるものではないということである。とりわけ、彼が指摘した教師の志向性の1つの当座主義は、戦前のわが国ではそうした傾向もある程度認められたであろうが、今日では恐らく基本的にあてはまらないと考えられる。まして、わが国においては教職の経済的地位は相当上昇しているし、また、社会一般の教職に対する伝統的な道徳的価値を重んずる精神風土からして、この点でのかなりの差異を無視してはならない。さらに、公教育制度の歴史的な性格という側面においても、その形式的な面はともかくも体質的には、アメリカとの間に相当の違いがあることを認識しなければならないと思う。それゆえ、本書におけるローティの指摘がストレートにわが国の教職にも適合するとするような、安易な見方は危険でさへあらう。

しかし、こうした限定をしたうえで、なお彼の指摘が、当座主義という志向性を除外するならばおおむね妥当しうると仮定することが一応許されるならば、筆者は本書から次の2点について、大きな示唆を得られると思う。

第一に、教師教育の研究および改善のための諸施策の検討にあたって、思弁的な観念上の論

構成（いわば机上プラン）では、およそ多大な有効性は期待しがたいという点である。たとえば、教員の現職教育を例にとってみよう。単に、教員の研修機会を増やせば、教師の職能が高まり、学校教育の質的改善が可能になる、などの考え方は、あまりにも論拠が薄弱であることを、本書から十分汲み取ることができよう。また、たとえ丹念にその目標——手段（内容・方法）を計画化してみても、教師自身の内面的な感情世界の固有な性格を考慮してなされたものでなければ、上すべし、場合によっては教師からの直接・間接の拒否反応さえも惹起しかねないとするのである。この点で、教師の個人主義をいかに打ち破るかが一つの重要な鍵ではないかと思われる。自己養成的性格をもった教職の職務内容自体の不確実性やそれに伴う教師の不安感を除去しうる道を、深く吟味し案出すべきではないかと考える。

よって、教師自身が、自己の職業生活にまつわる内面世界を謙虚に、しかも広い視野から見つめ直すという勇気のいる作業こそ、教師教育の改善を指向するにあたって、もっとも重要な課題としなければならないと考える。こうしたことは、研究面においても視座の再検討を要することを意味している。

第二に、教職のこうした「エートス」の変革をより確実なものとし、さらには学校教育の質的改善に資する、具体的学校改革の方向について少し展望してみたい。

教師の個人主義や、その背景にある教職の職務の不確実性という課題を克服するうえで、最も現実的でしかも大きい効果が期待できるのは、学校内での教師の就業形態の変革であることを本書は示唆していると受けとめたい。つまり、教師の直接的な行動環境である学校組織において、教師の協働努力を積極的に推進する組織の手だての必要性を、このローティの研究成果が強く示唆していると考えるのである。

その典型的な例として、教授組織改革をあげることができる。たしかに、わが国でも1960年代に入って教授組織改革が学校改革の一つの焦点になったが、その経緯を振り返ると、単なる形式の導入に終わり、学校の内から発する強力な学校改革の活力とはなりえなかったと見てもよいであろう。そこには、学校改革のまさに主体者たるべき教師自身の、意識変革という基本的かつ前提的な条件が十分顧慮されていなかったがゆえに、論じられたほどの成果をほとんど見ないままに今日に至っていると考えられる。いわば、「仏作って、魂入れず」という様相を呈したと、筆者は判断せざるをえない。（もちろん、教職員数の不足や物的環境等の不備も無視しがたいが。）

したがって、筆者は、基本的には学校改革の内発的可能性を、教師自身に求め、とりわけ彼らの特有な内面世界にわけ入った視点から、その現実的で確かな方途を案出していくべきことを、ローティの本書を通して改めて深く認識するのである。

以上の点はまた、教育行政・学校経営研究一般に敷衍して言えば、教育の現実状況に対する鋭い、しかも深い洞察を欠いたまま、論拠の薄弱な論議に甘えてしまっている傾向の強い研究水準の現状に対する警鐘として、ローティの本書のもつ意義は少なくないと思われる。「うまくいかなくてもともと、うまくいけばもうけもの」（sink or swim）とローティが言う教

職の職務の不確実性を、およそ完璧とはいわないまでも、真正面から見据え越えうる明確な方向や問題意識を欠いた、あるいはこうした問題を避けて通ろうとする研究は、もはや顧みられなくなるのもそう遠い将来ではなかろう。